台大日本語文研究第 28 期
2014 年 12 月，頁 115-137
2014-10-15 收稿，2014-12-06 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.2014.28.115

高見順的南洋作品探究
－以與《高見順日記》的比較為探討中心（Ⅰ）－

洪瑟君*

摘要

日本近代的南方風潮中，許多作家、文人前往南方並留下大量與南方相關的作品及紀錄。作家高見順也是其中之一。他在昭和十年代曾有兩次前往南洋的經驗，第一次是在昭和十一年的一月至五月，與作家友人三雲祥之助同行前往當時的荷屬東印度旅遊，另一次是昭和十六年十二月至十八年一月，以徵用作家的身份被派遣至緬甸，經歷約莫兩年的從軍生活。經歷這兩次的南洋體驗，高見順寫下〈蘭印的印象〉、〈蘭印點描〉、〈朝南之旅〉、〈緬甸記〉等大量的作品。

在南洋的這段期間，高見順亦留下了詳盡的日記。據高見順自己所言，留下這些日記的目的是爲了當作日後書寫作品的題材。然而，雖說這些與南洋相關的作品內容都是高見順依據自己當時所留下的日記爲基礎加以增刪修改書寫而成，但從其公開發表的作品與其私人的日記當中，可發現兩者在內容描述上的明顯差異。本論文將以高見順的蘭印相關作品爲探討對象，將高見順於當時公開發表的作品與其日記相比較，分析兩者的異同之處並探討其背後所隱含的意義。

關鍵詞：高見順、《高見順日記》、荷屬東印度、「渡南遊記」

臺灣大學學術期刊資料庫

* 台灣大學日本語文學系助理教授

Exploration of Jyun Takami's Southern Works: Comparison With Takami Jyun's Dairies (I)

Hung, Se-Chun*

Abstract

In Japan's modern history of the Southern trend, many writers and scholars headed to the South and left lots of works and records associated with the South. Writer Jyun Takami was one of them. He had two trips to the Southeast Asia in the Showa generation, the first trip to Dutch East Indies with his friend Syounosuke Mikumo from January to May, the 16th year of the Showa Generation. The second trip was to Myanmar for 2 years of military life as a dispatched writer from December, the 16th year to January, the 18th year of Showa generation. After these two experiences, Jyun Takami wrote lots of works such as ‘the Impression of Dutch East Indies’, ‘the Sketch of Dutch East Indies’, ‘Journey to the South’ and ‘Myanmar Note’.

During this period, Takami also left a detailed diary along. According to Jyun Takami, these diaries were intended to be subjects for future writing. However, although these works associated with the Southern contents were written based on adjustment of Takami's own diaries, one can tell the significant differences between the published works and the private diaries. Using Takami's associated works of Dutch East Indies as the discussion topic, this paper will compare Takami's published works with his private diaries and analyze the differences while exploring the meaning hidden beyond.

臺灣大學學術期刊資料庫

* Assistant Professor, Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

Keywords：Jyun Takami, Takami Jyun's Diaries, Dutch East Indies,
‘Travel Notes to the South

臺灣大學學術期刊資料庫

高見順の南洋作品探究
—『高見順日記』との比較を中心に（Ⅰ）—

洪瑟君*

要旨

本日本近代の南方ブームの中で、数多くの作家や文人は南方に発ち、南方に関する作品や記録を残した。作家高見順(1907-1965)もその中の一人である。彼は昭和十年代に海を渡って南洋へ行った経験を二回も有している。一回目は昭和十六年の一月から五月まで、画家の友人三雲祥之助と共に、当時のオランダ領東印度（蘭印）への旅であり、二回目は昭和十六年十二月から十八年一月まで、徴用作家としてビルマに派遣された二年ほどの従軍体験であった。二回の南洋体験によって、高見は「蘭印の印象」、「蘭印点描」、「南への旅」、「ビルマ記」、「ビルマ雑記」など、数多くの作品を描いた。

南洋に滞在している間、高見順は殆ど一日も欠かさずに日記を付けていた。高見自身の話によると、旅日記は、後日のためのメモとして残されたものである。しかし、それらの南洋に関する作品は高見順が自分の日記の内容に基づいて添削して書いたものとは言え、「公的」な作品と「私的」な日記を比較して見ると、その内容には明らかな差異が見られる。本論では、高見順の蘭印に関する作品を取り上げ、当時公開出版された作品と彼の日記を比較し、両者の内容や描写の異同を分析した上で、その背後に隠れている意味を究明したい。

キーワード：高見順、『高見順日記』、蘭印、「渡南遊記」

* 台湾大学日本語学科助理教授

臺灣大學學術期刊資料庫

高見順の南洋作品探究
―『高見順日記』との比較を中心に（Ⅰ）―

洪瑟君

一、はじめに

明治以降、日本は南進論に基づき南方に進出した。日本中が南に目を向け始め、南方に対する関心が徐々に高まっていた。明治期から昭和期に至り、南方関与の実状と目的は時代に従って多少変化していたが、総じて一種の南方ブームが近代日本で盛んになったのは疑いようのない事実と言える。その南方ブームの中で、南方に向かう目的はそれぞれ異なっていたが、数多くの作家や文人は南方に発ち、南方に関する作品や記録を残した。

作家高見順(1907-1965)も、この南方ブームの中で南洋へ向けて旅立ち、そして南洋に関する作品を書いた作家である。彼は昭和十年代に海を渡って南洋へ行った経験を二回も有している。一回目は昭和十六年の一月から五月まで、画家の友人三雲祥之助と共に、当時のオランダ領東インド（蘭印）への旅であり、二回目は昭和十六年十二月から十八年一月まで、徴用作家としてビルマに派遣された二年ほどの従軍体験であった。一回目の蘭印旅行の後、高見順は蘭印で自らの目で見た蘭印の風物や当時の蘭印の状況を「蘭印の印象」や「蘭印点描」などの文章に書いた。そして、二回目の南洋徴用体験によって、「ビルマ記」や「ビルマ雑記」などビルマに関する作品を描いた。

一方、それらの南洋に関する作品は高見順が自分の日記の内容に基づいて添削して書いたものである。高見順は昭和十六年一月から昭和四十年に食道癌で亡くなる一ヶ月前まで途絶えること無く日記を書き続けていた。残された厖大な量の日記は漸く戦後の昭和三十八年頃、出版社の要望に応じて公開出版された。そもそも日記というものは、日々の出来事や自分の感情、考え方などを人目を配慮せ

臺灣大學學術期刊資料庫

ずに、自分の心に従って忠実に記録したものである。しかし、周知の通り、昭和十六年は太平洋戦争が勃発する寸前の緊張していた時期であり、出版物の検閲が一層厳しくなった時期とも言える。その点を考えれば、高見順が当時、どのように個人向けの「私的」な日記を基にして、公衆向けの「公的」な作品を編み出したのか、それは興味深い問題である。従来の研究では、高見順の南洋作品に論及する際、作品の内容と彼の日記とを比較する視点で論じるものが欠如している。本論では、高見順の蘭印に関する作品を取り上げ、当時公開出版された作品と彼の日記を比較し、両者の内容や描写の異同を分析した上で、その背後に隠れている意味を究明したい。

二、『高見順日記』の位置付け

高見順は昭和十六年一月から昭和四十年に食道癌で亡くなる一ヶ月前まで、殆ど日々間断無く日記を書き続け、膨大な量の日記を残した。これだけ膨大な日記を残したことから、「書き魔」と称された作家高見順の性質が見られる一方、日記には高見の「克明さ、貪婪さ、言い換えれば、外への旺盛な観察記、内へのナイーブな省察記」が溢れているとも言われている[1]。先行研究では、常に『高見順日記』を永井荷風の『断腸亭日乗』と共に論及している。例えば、中西昭雄は永井荷風と高見順の日記を手がかりに、両者の日記記録を通して戦時下の広告宣伝や歌謡曲や演劇などを分析し、戦時下のサブカルチャーを論じている[2]。それは高見順と永井荷風が従兄弟同士であるためだけではなく、両日記が共に両作家の「『自分』史であって、同時に同時代史、つまり昭和という時代の『資料』として意義をもつ」[3]からである。また、高見順の日記は殆ど戦時中及び戦後まもなくの時期に集中しているため、彼の日記を通して高見自身が戦時下

[1] 保昌正夫「「徴用」の旅・「高見順日記」」、『国文学 解釈と教材の研究』25(7)、1980 年 6 月、pp. 108－109。
[2] 中西昭雄「戦時下のサブカルチャー　永井荷風と高見順の日記を手がかりに」、木村一信等編『戦時下の文学――拡大する戦争の空間』、インパクト出版会、2002 年、pp. 142－157。
[3] 同注 1。

臺灣大學學術期刊資料庫

において命に対する思索を論じる研究もある[4]。総じて言えば、高見の日記は「克明な記述の根底に、時代や社会を批判的に捉える眼と、つねに自己を内省する姿勢とが内在している」[5]と評されており、彼の作品を研究する際に不可欠な資料と考えられる。

『高見順日記』は全八巻で計九冊、昭和三十八年十一月から勁草書房により刊行され始め、四十年五月までに全巻出版された。その日記の内容は次のようである。

第一巻：渡南遊記・徴用生活（昭和 16 年 1 月至昭和 17 年 9 月）
第二巻上：ビルマ従軍・銃後のたたかい（1）（昭和 17 年 10 月～昭和 18 年 4 月）
第二巻下：銃後のたたかい（2）・渡支日記（昭和 18 年 5 月～昭和 19 年 12 月）
第三巻：末期の記録（昭和 20 年 1 月～昭和 20 年 4 月）
第四巻：原爆投下（昭和 20 年 5 月～昭和 20 年 8 月）
第五巻：敗戦の表情（昭和 20 年 8 月～昭和 20 年 10 月）
第六巻：廃墟の日常（昭和 20 年 10 月～昭和 21 年 3 月）
第七巻：インフレと筍生活（昭和 21 年 4 月～昭和 22 年 2 月）
第八巻：混迷と再建（昭和 22 年 3 月～昭和 26 年 5 月）

また、上記の時期の日記以外で、『高見順日記』に収録できなかった日記はその後、『続高見順日記』と題して出版され、全八巻である。高見順本人は昭和四十年の八月に食道癌で帰らぬ人となったため、全ての日記の刊行を待つことができなかった。それゆえ、『続高見順日記』の校正、注解などは高見の妻の秋子[6]の手によって完成された

[4] 百瀬久「高見順の戦時下の思索――『高見順日記』昭和二十年」『東洋学研究』40、2003 年、pp. 37－51。
[5] 川上勉「序章　高見順と昭和の時代」『高見順　昭和の時代の精神』、萌書房、2011 年、pp. 3－13。
[6] 昭和三十三年五月に、高見の妻・秋子は高見順の旅行中、小野田房子との間に出来た女児を順が認知していたことを偶然に知った。夫に裏切られて絶望した秋子は、昔の哀れな自分と決別しようとして、高見順への手紙の中に「秋子は死にました。今日から晶子と生まれ変わります。」と書き、自分の名前を高間晶子と改めたのである。（財団法人日本近代文学館編『高見順　秋子との便り・知友との便り』、博文館新社、2004 年、pp.122－125）本論では、人名を混乱させないために、年代を問わず、高見の妻の名前を全て秋子で表示す

臺灣大學學術期刊資料庫

のである。

高見順の南洋文学を分析・研究する際に、『蘭印の印象』『文藝随感』や『ビルマ記』などの単行本は言うまでも無く重要なテキストと考えられる。一方、それらの単行本の内容は、高見順が昭和十六年の一月から付け始めた日記の中に記載されている蘭印での旅行記とビルマでの徴用体験を基にして書いたものである。しかし、『蘭印の印象』という単行本の後書に、高見順は次のように記している。

> 旅日記は、これはもともと世間に発表するつもりではなく、後日のためのメモとしてせいぜい詳しく、豆のやうな字で日記帳につけたものなのでした。そしてその一部（スラバヤ日記の前まで）を、ジャバに上陸の際没収されない為に船に托して家に送つて貰つたのでしたが——出発前に雑誌社とそして家内と固く約束したにも拘らず、私が原稿を旅先からさつぱり送らなかつたので、経済的な理由やら雑誌社への義理やらで家内が困り果てた挙句、私の友人と相談してその日記の一部を雑誌社にわたし米塩の資としたのでした。のちにそれを知つた私は、自分の無責任を棚に挙げて、発表するつもりでなく書いたものが発表されたその恥しさに気も顛倒するほどでした。しかし軈て仕方がないと思ひ、一度恥を掻いた以上はと、日記のあとも続けて、これはいくらか手を入れて、発表しました[7]。

即ち、思いがけなく出版社に渡された一部分の日記のほか、その後出版社に出した文章は全て意図的に日記の内容を添削して書き直したものである。

一方、単行本に収録された部分以外、戦時及び戦後に書かれた高見順の日記は当時発表されていなかった部分が多い。全ての日記は昭和四十年頃、『高見順日記』と『続高見順日記』が出版されてはじめてその日記内容の全貌を窺うことができる。『高見順日記』の第一巻は「渡南遊記」と「徴用生活」二つの部分に分けられている。「渡

る。

[7] 「解題」『高見順全集』第 19 巻、勁草書房、1974 年、p．779。

臺灣大學學術期刊資料庫

南遊記」では蘭印旅行の見聞が記されており、「徴用生活」では徴用作家としてビルマでの従軍体験が記録されている。第一巻が出版される際に、高見順は序の中で下記のように述べている。

> この高見順日記第一巻は、私の日記のなかのおもしろそうなところから第一巻として公表を開始したのではない。私の日記は実際にこの第一巻からはじまる。それまで日記というものはつけてない。
>
> 昭和のはじめ頃から末端ながら思想運動に関係していた私は、検挙されると必ず食う、家宅捜索にそなえて、日記はつけないようにしていた。つけられないのだ。累を他に及ぼすおそれから、つけてはならないのだ。その習慣がながく身についていた[8]。

周知のように、高見順は昭和三年五月に東大の中に結成された「左翼芸術連盟」に参加し、その機関誌の『左翼芸術』へ寄稿して以来、プロレタリア文学を追求していた。東大卒業後、彼はプロレタリア作家として活動していたが、昭和七年に治安維持法違反の容疑で検挙・拘留され、執筆活動ができない時期が暫く続いていた。その後、余儀なく転向をさせられ、それまでとまったく異なる作品によって文壇に再登場したが、左翼運動に関わっていた時期には警察が定期的に家宅捜査を行う恐れがあるため、高見順は日記をつけることができなかった。警察の監視から逃れることができるのは南洋へ行く時期のみであったから、蘭印への旅をきっかけとして、高見順は日記を付け始めたのである。しかも、当初、高見が日記をつける目的は、ただ将来の文学創作に些細な手がかりを残すためであり、出版するつもりは全くなかった。日記は時代を映し、書き手を映している。やっと自由に自分の書きたいものを思う存分書けるようになった高見順はその私的な日記にどのような内容を残したのか、高見順の日記は作家高見順や彼の作品を探求する際には、比較研究の対象として欠くことのできない文献資料と考えられる。

[8] 「序」『高見順日記』第 1 巻、勁草書房、1965 年。

臺灣大學學術期刊資料庫

三、蘭印旅行に関する作品と日記「渡南遊記」

（一）日記体作品「南への旅」

『高見順全集』の中に収録された蘭印に関する作品は「蘭印の印象」「蘭印点描」「土民の女」「蘭印映画記」「蘭印での感想」及び「南への旅」などがある。それらの作品は、いずれも高見順の昭和十六年の蘭印旅行の経験に基づいて書かれたものであり、即ち、高見順の日記に残された記録を手がかりとして描かれた作品である。全ての作品は当時の新聞や雑誌などに掲載され、或いは単行本『蘭印の印象』（昭和十六年九月・改造社出版）と『文藝随想』（昭和十七年十一月・河出書房出版）に収録されて出版されたことがある。その中で、他の作品とやや異なり、日記の形式で描かれているのは「南への旅」[9]という作品である。

「南への旅」における日記体文章の日付は、高見が昭和十六年一月二十七日に南洋へ旅立った日から、蘭印のマラン市滞在中の三月三日までである。前節でも述べたように、一月二十七日から二月十二日までの日記は、高見がスラバヤに上陸する前に没収されないように先に家へ送り[10]、そして、その中の一部は、思いがけず高見の妻によって出版社に渡された。高見の妻によって出版社に渡されたのは日記のどの部分かは不明だが、高見が『蘭印の印象』の後書でそのことについて特に言及したという点を考えると、高見の妻により出版社に渡された部分はその後『蘭印の印象』にも収録された「船中日記」（二月六日の日付）、「メナド寄港」（二月八日の日付）及び「マカッサル寄港」(二月十一日の日付)を指していると推測できる。

---

[9] 高見順の日記体作品「南への旅」は、本来『蘭印の印象』と『文藝随感』の中に一部ずつ収録されている。『高見順全集』においては、両書における日記体作品を全て年代順に並べ、「南への旅」というタイトルでまとめた。本稿で使用したテキストは全集に収録されている「南への旅」であることをお断りしておく。

[10] 高見順の昭和十六年二月十一日の日記に「ゲ ンキオウセイ、アススラバヤツク、ニツキフネニタノミオクル、クワシクハソレヲヨメ」と妻の秋子からの電報に返信を打ったと書いており、二月十三日の日記にスラバヤ上陸した際に税関で調べられたことを記している。日記の記述に従い、先に家へ送られる日記は一月二十七日から二月十二日までの部分と推測できる。（同注 8 前掲書、pp.117-118。）

臺灣大學學術典藏資料庫

『蘭印の印象』に収録された日記体文章は、現在『高見順全集』の「南への旅」における「船中日記」、「メナド寄港」、「マカッサル寄港」、「スラバヤ日記」、「ブロモ登山」及び「マラン日記」の六部分に分けられる。「スラバヤ日記」は昭和十六年二月十三日から十八日までの日記で、全集の「解題」によると、単行本に収録される前に、かつて昭和十六年七月に『文藝』という雑誌に掲載されたことがある。また、「ブロモ登山」は昭和十六年二月二十三日の日記で、当時、昭和十六年八月の『経済情報』に載せられていた。更に、「マラン日記」は昭和十六年三月二日と三日の日記であり、昭和十六年の七月に『知性』という雑誌に掲載されていた[11]。つまり、「南への旅」における「船中日記」、「メナド寄港」及び「マカッサル寄港」三篇は当時妻の秋子に出版社に渡されて意外にも新聞雑誌に掲載されたが、「スラバヤ日記」、「ブロモ登山」及び「マラン日記」三篇は、高見順がその後自らの意思で出版社に提出したものと言える。

実際に高見順の日記と詳しく比較すると、「南への旅」における「船中日記」、「メナド寄港」及び「マカッサル寄港」三篇は、当時高見の妻が高見と相談することなく、直接出版社に渡したため、その内容は、些細な個人的なことや枝葉末節の日常記述が削除された以外、日記の原文とほぼ一致していると言える。唯一大きな違いが見られるのは、二月七日の日記に記されているジャバの女と内地の女性に対する論争が「船中日記」の中では全部消されていたことである。日記において、高見順と山上というジャバで活躍している内地人との興味深い対話は次のように描かれている。

> 「日本へ行って、日本の女を見てガッカリした。顔はキレイだけど、スタイルは落第ですね。ジャバの女は胸がこう張っていて、とてもいいですよ。――百貨店へ行って、日本の女のやせた貧弱な胸を見て、いやになった。」
>
> 「百貨店などへ行く女を見て、日本の女性をけなされては困る。いいところの娘は百貨店や銀座などをウロウロしてはいない」

[11] 同注 7、p.771。

臺灣大學 臺灣人學學術期刊資料庫

われながら、バカバカしいことをいうと思った、ついそんなことをいって反駁したくなった。自分の言葉の嫌味に充分眉をひそめながら――。

「日本にだって、スタイルのいい女性はいますよ」

山上君のいうことに実は私も賛成なのであるが、反対したくなるのだ。――貧弱な身体は私もきらいで、ジャバの女をまだ見ていないが、胸を張っている豊満な女性を私も好きなのである。柳腰の不健康さは嫌いだ。出っ尻、鳩胸の健康を私は取る[12]。

女性に対する美の感覚が一致しているにも拘わらず、山下君のジャバについての自慢話ばかりを聞いているうちに、つい不機嫌に反対したくなる高見順の心理描写である。この部分の描写は、はじめから出版社に削除されたのか、それとも単行本『蘭印の印象』に収録された際に高見順が自ら消したのかは不明であるが、その文章の中で言及された南洋の女性と日本内地の女性をめぐる言論はやはり少し不謹慎と考えられたため、論争に関する内容が全て削除されたのではないかと思われる。

一方、高見順がその後、自らの意思で新聞雑誌に投稿した「スラバヤ日記」、「ブロモ登山」及び「マラン日記」三篇を高見の日記と詳しく比較分析すると、その三篇の内容は、日記の原文より大幅に加筆されていることがわかった。そもそも高見順が日記をつけたのは将来の作品の為の素材を残すためである。それゆえ、日記における南洋の風土人情や当地での体験などの記録を基にして、作家の意思によって大幅に添削して文章の内容に彩を添えたとしても不思議ではない。しかし、私的な日記「渡南遊記」と当時公開掲載された日記体作品を詳細に比較すると、作品における加筆された部分は一貫した方針に従っているように見える。例えば、二月十三日の日記の原文に、「三雲氏令弟（註＝当時、南洋海運のスラバヤ支店勤務）船へ来る」[13]と記されている。高見は日記の中で、スラバヤで初対

[12] 二月七日の日記。同注 8 前掲書、pp.63-64。
[13] 二月十三日の日記。同注 8 前掲書、p.119。

臺灣大學學術期刊資料庫

面した友人三雲の弟に対し、単なる「三雲氏令弟」と一言触れただけで、他には何も説明していなかった。しかし、「スラバヤ日記」において、高見は「三雲氏令弟」を「三雲君の知人 S 君」に換え、長い文章でこの S 君について描写している。

> 三雲君の知人 S 君が船へ来る。その勤務先の会社の関係で、船へ入れるのである。帝大時分にラグビーの選手をしてゐたといふだけあつて、六尺豊かの堂々たる体躯で、瀟洒な麻服にヘルメットをかぶつてゐて、その堂々さは背の高い白人をも充分威圧するに足ると思はれる。かういふ人が外地で働いてゐてくれるのは、何か頼もしくうれしい感じ。頭の点では日本人よりもずつと劣つてゐるやうな白人に、単なる肉体の条件だけで、何か威圧されることほど、不愉快で馬鹿々々しい話はない。チンチクリンの日本人のヘルメットは、頭でつかちで醜態だが、S 君のは実によく似合ふのだつた[14]。

作品の中で、高見順は〈私〉にとって親近感を覚える「友人の弟」を故意にやや距離感を保つ「友人の知人」に換えた。こうして、人事を言うように客観的な視点で描かれている S 君には人物像の信憑性がより一層高くなったと思われる。帝大卒で、六尺豊かの堂々たる体躯を有する S 君は、どの方面から見ても優秀な人材である。背が低い一般の日本人と違って、S 君のヘルメット姿には少しも違和感を感じない。このような S 君は、まさに当地の支配層の白人に比肩できる存在と言える。S 君に対する詳しい描写は、一見 S 君を賞賛する言葉と見えるが、その裏には高見の蘭印当地の白人に対する批判と不満の気持ちが読み取れる。白人は頭脳が日本人より遥かに劣っているにもかかわらず、肉体上で優勢を占めているだけで、横暴な手段で蘭印を統治・支配し、傲然な態度で他民族を威圧している。蛮力だけで威張る白人と相対し、誇りに思われる S 君は対照の役割として描かれていると考えられる。

一方、二月十四日の日記では、高見順は当地の映画館 Luxor へ「風

[14] 「南への旅―スラバヤ日記」、同注 7 前掲書、p.151。

臺灣大學學術期刊資料庫

と共に去りぬ」というアメリカ映画を見に行ったことを書いている。しかし、映画「風と共に去りぬ」を見たことを記録したにもかかわらず、日記においては、その映画に関する記述はただ「七時半から始まって、十二時に終わる」[15]と記しただけで、映画についての内容や感想などは全く触れていなかった。また、その他の映画に関する記述は、いくつの映画館の名前とそこで上映中の映画名をメモのように残しただけである。二月十四日の日記と対照して見ると、「南への旅」において、高見順はこの異国での映画体験を通して、文化の殖民現象を長々論じている。当地の土民映画を見ようとしたが、新聞の映画広告欄を見ると、当地の映画館では全てアメリカ映画を上映している。アメリカ映画が多くの和蘭人に愛され、蘭印ではアメリカ映画の見物人は殆ど和蘭人である。アメリカ映画の素晴らしさと世界性に感嘆しながら、高見はその現象について、次のように論じている。

> （前略）――この事実も作用してゐたのだが、アメリカ映画を和蘭人が見て他愛なく喜んでゐるその姿に、私は、――軽蔑といふほど強くはつきりしたものではないが、何か哀れな侘しい寒寒としたものを感じさせられたのである。和蘭人はインドネシア土民を征服して、本国の五十八倍もあるといふ東印度諸島を自分たちの植民地にしてふんぞり返つてゐるが、その彼等がアメリカ映画に狂喜してゐるさまは、逆にアメリカの文化的植民地に、自ら気付かず、させられてゐる感じなのである[16]。

一見普通な映画体験の描写であるが、その文章の中で、高見の文化殖民の二重構造を説こうとする意図が窺える。当地の土民俳優が出演した映画が和蘭当局の統治下で弾圧されて、一般の映画館で殆ど見られない状態となった現実に言及しながら、文化的な面から自分の文化・芸術が守れない被殖民側の悲哀を暗示する。その一方、和蘭人が蘭印当地の文化活動に強い統制力を持っているにもかかわら

[15] 二月十四日の日記。同注 8 前掲書、p.122。
[16] 同注 14、p.156。

臺灣大學學術期刊資料庫

ず、映画のようなサブカルチャーの力によって、不覚にも逆にアメリカによって文化的に殖民させられたという皮肉な現象をも論じている。勿論高見は作品の中でも蘭印で見た文化殖民の実態を通して日本の外来文化を受け入れる様子を反省している。しかし、結論の「外国文学を読むのも必要だし、外国映画を見るのもいいが、根本は心だ」[17]という発言には、やはり無闇に「アメリカ映画に狂喜している」和蘭人の有り様を風刺しようとした意図が感じられる。

また、「スラバヤ日記」だけではなく、「ブロモ登山」と「マラン日記」にも日記原文に大幅加筆されたところが見られる。「ブロモ登山」では、高見順はS君と三雲と共にブロモ火山を登った過程を詳細に描いており、「マラン日記」では、S商会のY君とマラン市で観光し、土民の踊りを観賞した経験を述べている。日記原文における記録式の記述と違い、作品では山を登る途中の風景や当地土民の生活について生き生きと描いており、日記の中で見られない記述も多く書き加えられた。例えば、「ブロモ登山」において、年取った土民が観光客に火山の火口に投げられた金を拾いに行ったことについて長々と書き、自ら生命の危険を冒して金を拾った土民に対しても、他人に生命の危険を冒させてそれを面白がる客も強く非難している。高見は作品の中で、土民がどのような気持ちで危険を冒して金を拾いに行ったか、その土民の心理を一々推測したが、最後に「そんな浅間しい稼業も土民の窮迫の故であらうか」[18]という自問自答のような結論をつけ、当地土民の貧窮に着眼したのである。「マラン日記」においても、乞食のような風体をしている苦力や女子供の駅売りについて言及し、当地の土民の貧しい生活の実態を記している。また、「猿の名所」という観光の名所で、大勢の土民の子供たちが裸で池の中に飛び込み、水に潜って観光客が池に投げた金を取るという描写も見られる。更に小さな子供が芭蕉の幹で作った玩具の車で遊んでいる場面を描く際に、高見はその車を「うまく作ってあるのに感

[17] 同注16。
[18] 「南への旅―ブロモ登山」、同注7前掲書、p.166。

臺灣大學學術期刊資料庫

心したが、土民の子供はそんな悲しい玩具で遊んでゐるのかと何かいたはしかつた」[19]と嘆いた。

邦人の雑貨屋などには内地製のセルロイド人形とかさういつた玩具を売つてゐるが、よほど余裕のある土民しか買へないらしく、街で玩具を持つて遊んでゐる子供を見たことが無かつた。土台、玩具屋（玩具専門店）などといふものは全然無いのだ。玩具屋のいつぱいある内地の子供たちの幸福さを思ふ[20]。

高見は内地の子供たちと対照して、当地の土民の子供の貧しさを強調している。作品中に所々現れる「新開地の立派な新しい家」を持つ支那人、テニスコートで楽しげにテニスをやっている和蘭人や混血人、クラブ風の豪華な家でダンスしている和蘭人などの描写は、当地の土民の惨めな生活様態と強烈な対比として皮肉に描かれている。高見順の私的な日記と当時雑誌に投稿した日記体の作品を比較して見ると、日記原文の記録式記載を作家の文才によってその内容をより豊かにした他、彼は当時公開発表した作品の中に殊更に当地の土民の貧乏な暮らし方についての描写を加え、当地の土民に憐憫の情を表そうとしている。それと同時に、作品の行間にも当時における支配側の和蘭当局への不満と皮肉が窺える。

（二）他の蘭印関連作品

日記体作品の「南への旅」の他、高見順は蘭印旅行の体験に基づいて書いた作品も多く残した。言うまでもなく、それらの作品も同様に高見順の日記を手がかりとして描かれた作品である。しかし、それらの作品と日記とを比較してみると、たとえ同じく土民の下男（ジョンゴス）・下女（バブ）についての描写でも、日記と作品の書き方や着眼点には雲泥の差があると言える。二月九日の日記では、高見はジョンゴスについて次のような面白い話を記載している。

ジャバは、日本の奥さん方の天国だという話を、事務長がする。文字通り、右のものを左へやらない。何から何まで下男（ジョ

[19]「南への旅―マラン日記」、同注 7 前掲書、p.170。
[20] 同前注。

臺灣大學學術期刊資料庫

ンゴス）や下女（バブ）にやらせる。たとえば藤椅子に寝ながら、雑誌を読んでいて、それを下へ落とすと、バブ！　と女中を呼んで、それを拾わせるといった始末。たとえ話ではなく、事実だという。女だけでなく、男も、――ねころんで雑誌を読んでいたが、不意にジョンゴスを呼ぶので、何をいい付けるかとおもったら、頭のまわりにハエがブンブン飛んでいてうるさいからとれと命じた。それを事実目撃したという。あまり何もすることがないので､日本から来たばかりの奥さんのうちには、そのため神経衰弱になるのもいるとのこと。

ある奥さんが、日本風に自分で洗濯をした。すると、女中が暇をくれといって出てしまった。女中のような真似をする奥さんのところで、とても女中をやってはいられない、女中のそのまた女中はいやだと出て行ってしまったというのだ[21]。

どのような些細なことでもやってくれるジョンゴスとバブがいるから、毎日家事に追われる奥さんにとってはジャバは天国のようだという描写である。この記述において、高見順はジョンゴスとバブの仕事ぶりを面白く描いている。「家事が全部女中にされて神経衰弱になった奥さん」と「家事が奥さんにされて我慢できないから家を出て行ってしまった女中」との対照的な描写を通し、高見は諧謔を弄しながら、ジャバのジョンゴスとバブの仕事に対する勤勉さをも提示している。

他方、作品の中で、ジョンゴスについて描く際に、高見は常に憤懣と不平の口ぶりで述べている。作品「蘭印の印象」の冒頭では、彼は「和蘭治下のインドネシアの土民姿を思ひ浮かべてみるのに、一番強く鮮やかに来るのは､ジョンゴスとしての土民の姿である」[22]と述べている。しかし、ジョンゴスに対するイメージを鮮明に脳裏に焼き付けた理由は、日記で記述したジョンゴスの勤勉家のような仕事ぶりのためではない。彼が作品の中でジョンゴスの勤勉さを描

[21] 同注 8 前掲書、pp.97-98。
[22] 「蘭印の印象」、同注 7 前掲書、p.21。

臺灣大學學術期刊資料庫

いた一方、更にジョンゴスの卑屈な姿と態度を強調しようとしている。ジョンゴスは西洋人が「己の勢威を示したい、そして一種の権勢慾を満足させたい」[23]ため、じっとしていても汗がじりじり出てくる暑さの中でも、詰襟の洋服のお仕着せを着せられている。和蘭人の「食慾と同時に権勢慾を満足させてゐる」[24]ため、ジョンゴスたちは一人一人、様々の料理を別々の皿にのせて捧げ持ちながら、順々に和蘭人のテーブルに運んでいかなければならない。ジョンゴスの仕事態度を「おとなしく礼儀正しく従順無比、サービス満点」[25]と賛美したにもかかわらず、呼ばれたら慇懃に答え、猫のように足音もなく静かにやってくるジョンゴスに対し、高見は腹がたつほど悲しく思い、作品の中で、なんとも堪らない気持ちを何回も表明したのである。

> 褐色の顔は無表情だが、卑屈なものが全身に漂つてゐる。色こそ少し黒いが、日本とよく似た顔や身体つきをしてゐる。この日本人とよく似たインドネシア人を、誰が、このやうな憐れな恥づべき卑屈さに落したのであらう。なんとも堪らない気持ちだった。その卑屈さは、慇懃を通りこした所の表現的なものというより、身にすつかりしみつき、血のなかにも流れてゐる肉体的なものであることを、見た眼に直ちに明らかにするのだつた。同じ人類が、人類をこのやうな卑屈な人間に人為的に変へて了ふとは、――人類への許しがたい罪悪[26]。

高見順は蘭印の土民をこのような恥ずべき卑屈さに落した白人の支配者に、強烈な不平を訴えた。勿論当地の歴史的な要素を含めて考えれば、土民のその卑屈さは蘭領になってから形成されたものではないかもしれないとも指摘したが、土民の悪習が支配者によって「尊重」され、放任されていることに対し、「彼等の『尊重』政策は、所

[23] 同注 22。
[24] 同注 22。
[25] 同注 22、p.22。
[26] 同注 22、p.23。

臺灣大學學術期刊資料庫

詮自分さへよければ、土民はどうなつてもかまはぬといふ考へ方」[27]と評して、支配側の無責任さを批判している。また、憐れな土民は勤勉に働いているにもかかわらず、給料が非常に少ない。それだけではなく、物持ちの土民は欧風の服装を着ようとしても、「被征服民族が征服者の和蘭人と全く同じ服装をすることを禁じてゐる」[28]ため、欧風の服装を着る際には、土民の伝統的なカパラカインという帽子のようなものを被り、全身欧風という格好を避けなければならないのである。和蘭の植民地政策の下、蘭印社会で最も下級の「哀れな土民」の姿は高見の描写によって鮮明に提示されている。日記の中で淡々と描かれている勤勉な土民の姿は、作品の中では強いインパクトを読者に与える哀れな土民像に変身したのである。

また、蘭印の伝統文化に深く関心を持っている高見順は、日記「渡南遊記」においても、蘭印の土民映画について詳しく記録している。例えば、二月二十八日の日記に、二日間連続ジャバ映画を見たことを記している。二本の土民映画を見た後、高見は土民映画の特徴を次のような六点をまとめた。

> （一）何かというと、女が歌を歌う。（男女で恋の歌の合唱もやる）音楽映画という感じ。そしてまた、（二）何かというと、格闘の場面。日本の愚劣な時代劇の現代版という感じ。ただし格闘はなかなか凄く真に迫っている。心配な場面とか感動な場面だと、土人の客は舌をチチチと鳴らして Adoe（？）という。（日本人でもながくいると、この癖が移るという）（三）場面転換の場合、何の関係もない、美しい風景などをはさむ。（四）いずれも神通力を持った修行者が出てきて、主人公の危機を救ってくれる。前夜の筋に何の関係もなくいきなり出てきたが、二度目の映画は修行者が物語の筋に織り込まれている。（五）屋台の食いもの屋が、いかに土人の生活の大事な部分であるかが、二つの映画でわかった。何かというと出てくる。（六）格闘とい

[27] 同注 22、p.24。
[28] 同注 22、p.27。

臺灣大學學術期刊資料庫

うと、サロンの前をキチンと合わせ直す。格闘後、サロンで顔や手の汗をふく[29]。

この記述は単純に土民映画を鑑賞する角度から描いたものであり、単なる異文化体験についての素朴な記録と考えられる。しかし、作品「蘭印点描」において、高見はこの土民映画を見る体験を述べた際、その二つの映画は、「いづれも神通力を持つた修行者が出てきた。使ひの虎を従へ、主人公の危機を救ふのである。一般土民の無知蒙昧を反映してゐると言つて了へばそれまでだが、そこには、又白人に征服された憐れな土民が、自分達を現在の境涯から救つてくれる何か超人的な力を夢見てゐるのを現してゐる如くにも思はれてならなかつた。」[30]と述べている。「神通力を持った修行者が主人公の危機を救う」という筋は、土民映画の中で常に出現した極普通なパターンである。それにもかかわらず、高見は「白人に征服された憐れな土民が、自分達を現在の境涯から救つてくれる何か超人的な力を夢見てゐる」と、作品の中で自分なりに深く解釈したのである。彼は蘭印での単純な生活記録を作品の素材として日記から取材したが、同じ題材とは言え、作品では完全に異なった様態で表現している。作品の中で、高見順は故意に描写の着眼点を変え、蘭印の土民が悲惨な境遇に陥ったというイメージを作ったのである。

四、結び

以上、高見順の蘭印に関する作品と彼の日記「渡南遊記」とを比較し、両者の内容や着眼点の異同について分析した。その結果、当時公開出版された作品と高見自身の私的な日記には明らかな差異があることが分かった。彼の蘭印に関する作品は全て旅日記を基にして書かれたにもかかわらず、新聞雑誌への投稿を前提として描いた作品では、高見は特に殖民地支配側の専横と当地土民の悲惨な生活様態を強調しようとする意図が窺える。日記原文では殆ど提起され

[29] 二月二十八日の日記。同注 8 前掲書、pp.144-145。
[30] 「蘭印点描」、同注 7 前掲書、p.52。

臺灣大學學術期刊資料庫

ない和蘭人への不満と批判の声はかえって作品の中で散見される。

高見順が蘭印行を決意した昭和十五年は、日本の南方進出の一拠点としてインドネシアの存在が大きくクローズ・アップされた年であった。当時、日本内地で蘭印に関する書物が数多く出版されており、日本中に一種の蘭印ブームという現象が起こったと言える。この蘭印ブームの背後には、梅本宣之が論じたように、「蘭印に対する国民的関心が高まっていたことを示す」[31]と同時に、「日本政府の政治的関心、より具体的には蘭印進出の政治的野心の高まり」[32]をも示したのである。昭和十五年、「大東亜共栄圏」というスローガンが当時の外相松岡洋右によって掲げられ、欧米勢力を排除して、日本を盟主とする満州・中国及び東南アジア諸民族の共存共栄を説いた「大東亜共栄圏」の概念は次第に日本中に広げられていった。言うまでもなく、白人の勢力に対抗し、南洋島民と共存共栄する意識は高見にも多少影響したと考えられる。

高見の蘭印に関する作品が新聞雑誌に掲載され、単行本として出版された時点は、ちょうど第二次大戦が勃発する寸前から開戦まもなくの時期に当たっている。国全体には異様な雰囲気が漂っており、出版物の検閲が一層厳しくなり、文芸作品の発禁、削除が続出した。作家たちは文学の力によって国策に協力することが要求され、所謂国策文学を書かなければならない時期であった。当時、国策文学に抵抗感を持つ作家たちは、芸術至上主義的な韜晦の形か、或いは公然たる時局への妥協と協力の「擬装」をとって作品を書いた。高見順の場合、嘗て検挙・拘留されて一時的に作家活動がやむを得ず停止した経験があったため、文学の力で国の政策を支えたのは「自らの本意」か「やむを得ず行う擬装」かははっきりと言えない。しかし戦時下において、高見順は昭和十九年に日本代表として南京における第三回大東亜文学者大会に出席し、また昭和二十年六月に日本

[31] 梅本宣之「高見順における南方行の意味」『高見順研究』、和泉書院、2002年、p.129。
[32] 同前注。

臺灣大學學術期刊資料庫

文学報国会にも参加したという事実から考えれば、当時国策文学にはさして抵抗を感じなかったようである。それゆえ、大東亜共栄圏という理想を念頭に置きながら、人生初の南洋体験をして、長い間西洋の覇権に支配されていた蘭印で現実の南洋を見た高見順にとって、公開発表した作品の中で意図的に和蘭の植民地政策に反発し、当地土民の悲惨な遭遇に同情と憐憫の感情を表したのも不思議ではない。日記「渡南遊記」は、高見順が昭和十六年の頃、一人の旅行者として、文人作家の眼差しで単純に蘭印当地の生活を記録したものである。そのような日記に基づいて書かれた作品に西洋の勢力を批判する言説を多く書き加えたのは、作家が国策協力という意識の下に、文学の力によって大東亜戦争の理想を日本国民の読者に宣揚するための手段と考えられ、国策文学が鼓吹された時代の下、時勢に順応する一種の流れとも言えよう。

一方、高見順の二度目の南洋行は自ら旅行者の身分で旅立ったのではなく、徴用作家の身分として南洋へ派遣されたのである。徴用作家としてビルマで過ごした時期に書いた日記とその日記に基づいて書いた作品とは、またどのような異同が見られるのか、更に、高見が戦後の日記において、戦争や戦時下の作品についてどのように自省したのか、それらの分析と探究を今後の課題として研究し続けていきたい。

【付記】本稿は2013年11月1日にトゥンク・アブドゥル・ラーマン大学中華研究院・台湾大学文学院共催の「亞太文學、思想與文化傳釋」国際シンポジウムにおける発表原稿を加筆・修正したものであり、行政院国家科学委員会の研究助成（助成番号NSC 101-2410-H-002-183)による研究成果の一部である。

テキスト

『高見順日記』第 1 巻、勁草書房、1965 年。
『高見順全集』第 19 巻、勁草書房、1974 年

臺灣大學學術期刊資料庫

参考文献

保昌正夫著（1980）「「徴用」の旅・「高見順日記」」、『国文学 解釈と教材の研究』25(7)。

中西昭雄著（2002）「戦時下のサブカルチャー　永井荷風と高見順の日記を手がかりに」、木村一信等編『戦時下の文学――拡大する戦争の空間』、インパクト出版会。

梅本宣之著（2002）「高見順における南方行の意味」『高見順研究』、和泉書院。

百瀬久著（2003）「高見順の戦時下の思索――『高見順日記』昭和二十年」『東洋学研究』40。

財団法人日本近代文学館編（2004）『高見順　秋子との便り・知友との便り』、博文館新社。

川上勉著（2011）「序章　高見順と昭和の時代」『高見順　昭和の時代の精神』、萌書房

臺灣大學學術期刊資料庫